

ウナギの資源回復活動のご報告

パルシステムでは、2013年から、生産者とともに「大隅ウナギ資源回復協議会」を設立。組合員のみなさんからのポイントカンパと、ウナギ商品の利用点数×10円を生協として積み立てる賦課金を協議会へ送り、ウナギの資源回復に取り組んできました。みなさんからの温かいご支援に御礼を申し上げますとともに、活動の現状をお伝えします。

2015年度
収支報告

合計約**745万円**を
支援していただき、ありがとうございました。

(単位:円)

収入		支出	
●ポイントカンパ	3,700,900	1 鹿児島県ウナギ資源増殖対策協議会支援金	1,651,080
●賦課金※	3,667,715	2 放流モニタリング事業(賦課金※)	1,777,377
●繰越金	89,510	3 大きいウナギを使った蒲焼商品化	363,916
		4 学習会	1,855,038
●収入合計	7,458,125	●支出合計	5,647,411
差し引き収支		1,810,714	

繰越金である約180万円は、2016年度で生産者との交流企画や取り組みを伝えるリーフレットの増刷などに使用させていただきました。 ※賦課(ふか)金:ウナギ商品の利用点数×10円を組合員負担ではなく生協として積み立てる支援金

2016年度
は

合計約**500万円**
が集まっています。

(単位:円)

ポイントカンパ(4月1回~7月4回)	
	828,700
賦課金(確定:7月1回~7月4回)	
	4,348,175
●収入合計	5,176,875

※7月1回『大隅産うなぎ蒲焼2尾240g』のみ利用点数×20円で積み立てました。

ポイントカンパは
現在も受け付けています。
詳しくはチラシ裏面を
ご覧ください!

支援金を活用した取り組みの報告

1

鹿児島県ウナギ資源増殖対策協議会による研究と広報

●鹿児島県出水市農業用水路に「石倉カゴ魚道」を設置

設置場所で、ウナギの遡上と
定着を確認! すみかが拡大しました

資源回復のためには、ウナギが海から川へ帰って来られる環境が必要です。かつては川に続く田んぼにも生息域がありました。コンクリート水路になることでウナギが遡上しにくくなると予想された出水市の農業用水路には、ほ場整備事業の際に水路床面に石倉カゴが設置されました。協議会では、川と水路の境目にあった段差に石倉カゴ魚道を設置し、石倉カゴ部をモニタリングしたところ、ウナギの遡上と定着を確認しました。



農業用水路に設置した石倉カゴ



帰ってきたウナギ

●鹿児島県中州川に「石倉カゴ魚道」を設置

大小さまざまなウナギの遡上を確認

現在の日本では、ダムや段差になる堰(せき)などの構造物がない川は3河川しかありません。段差によってウナギが遡上できず、すみかが減っています。そこで、簡易かつ安価で実現できる、ウナギのための石倉カゴ魚道の開発・研究を実施。ウナギのエサでもあるエビやカニなど、大小さまざまなウナギを含めた生物が遡上できる魚道を開発しました。

●広報活動にも活用

鹿児島県内のみなさんに、ウナギの置かれている状況と資源回復の取り組みを伝えるため、ポスターを作成、また地元新聞に意見広告を掲載。理解を促し、協力いただける環境づくりを進めています。



石倉カゴ魚道

「石倉カゴ魚道」とは、筒状の網に石などを詰めたもので、これを段差に設置すれば、ウナギは石をつたって上流へ行くことができます。

石を詰めた「石倉カゴ魚道」があれば、上れる!

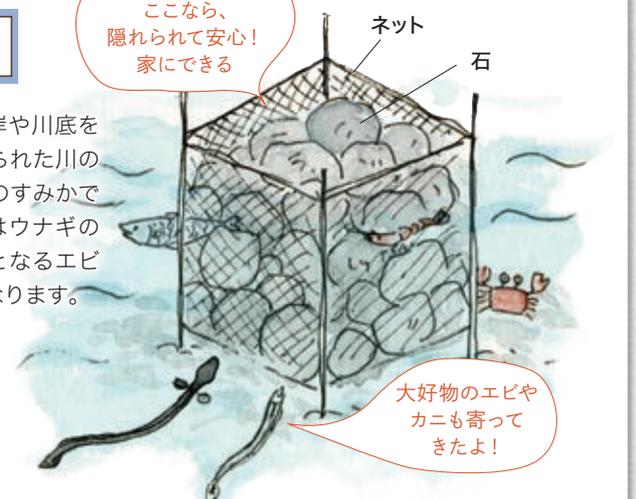
石倉カゴ魚道

川を横断して作られた「堰(せき)」や段差

石倉カゴ

「石倉カゴ」とは、両岸や川底をコンクリートで固められた川の中に設置するウナギのすみかです。石を積んだカゴはウナギの隠れ家になり、エサとなるエビやカニのすみかにもなります。

石が積まれた
ここなら、
隠れられて安心!
家にできる



大好物のエビやカニも寄ってきたよ!

2

放流モニタリング事業

川に放流したウナギの定着や成長の状況を定期的に追跡調査し、これまで明らかにされてこなかった放流効果の検証と、より効果的な放流方法の模索を行っています。

1 放流用ウナギの養殖



海水と淡水を混ぜた汽水にし、より自然に近い環境で育てます。

2 放流



体重・体長・胴回りを計測。放流ウナギであることがわかるように目を覆う膜の一部を蛍光塗料で着色し、さらに個体識別のために数mmの小さなタグを埋め込みます。

3 モニタリングで追跡調査



3~4カ月に一度、川に設置した石倉カゴを引き上げて、生息状況を調べます。

2015年
11月結果

放流したウナギは見つからなかったものの、カゴの中を天然ウナギやエビ、カニがすみかとしていることを確認しました。

2016年
5月結果

以前放流した養殖ウナギの体重測定の結果、天然の河川で捕食できていることがうかがえました。



1匹は放流用に育てた養殖ウナギ！成長を確認できました

結果

天然に近い環境で育てたウナギなら、放流に効果があると見られ、今後も引き続き調査を行います。

3

大きいウナギを使った蒲焼商品化



資源の有効利用のため、通常よりも大きく育てたウナギを原料とした商品開発を行っています。大きく育てると飼育期間が長くなり、飼料や養殖池を温めるためのコストが上がるなどの影響はありますが、資源保全を優先し、大きめウナギを原料とする商品の拡大を進めています。



通常よりもふっくら！

通常サイズ

腹部を中心に厚みがあります
大きく育てたウナギ



大きく育てたウナギは
ココが違う！

1. 限られたウナギ資源の有効利用につながります。
2. 身が厚めで食べごたえがあります。
3. 大きくてもおいしく食べられるように、しっかり蒸して焼き具合を調整、加工を工夫しています。

4

学習会を実施

2016年6月2日に「ウナギの資源回復のために、バルシステムができること」を開催しました。関係者の対談で、ウナギをめぐる最新のデータや生産・流通の現状を共有。その後専門家や生産者、役職員、組合員が班ごとに分かれ話し合いを行いました。表示や流通の適正化、モニタリングシステムの開発、生物多様性をめぐる新しい運動の展開など、さまざまな視点で「できること」の提案がありました。



当日参加者による発表の様子

Column

Q 知っていますか？ ウナギの一生

日本の川や海で成長した親ウナギは、遠く離れたマリアナ海溝まで泳いで産卵。稚魚は2,000~3,000kmの長旅をして日本の川へたどり着きます。



Q 食べることで、絶滅は 進んでしまわないの？

適度に食べるのであれば
絶滅するレベルではありません。
ウナギへの関心が薄れる
ことのほうが問題です。



九州大学 大学院
農学研究院准教授
望岡 典隆さん

ウナギの漁獲量は1960年代から減少し始め、ここ20年ほど低迷し続けている状態です。とり過ぎや食べ過ぎは問題ですが、適度に食べるのであればただちに絶滅するレベルではないと私は考えています。今は、正確な資源数や、資源保全の方法をしっかりと調査すべき時期。そのためにも、消費する側の協力は欠かせません。ウナギを食べないことで関心が薄れ、ウナギのすむ河川の環境にも興味がなくなっていくことのほうが危険ではないでしょうか。5~10年以上かけて大きくなるウナギは、資源回復に長い時間が必要。取り組み始めた調査を、今後も続けていく必要があります。

引き続き、ウナギの資源回復をめざす活動にご支援をお願いします。

1口100円のカンパにご協力ください。

注文用紙に、6桁番号と口数をご記入ください。

190969

放流モニタリング事業参加メンバー



みなさんの支援のおかげで、有意義な活動ができています。引き続きのご協力、よろしくお祈りします！